いわて　東日本大震災

ともに前へ ⑱

盛岡市の阿部裕子さん

周囲の支え 再開の力

軽快にはさみを動かし、以前世話になった「SAVE IWATE」スタッフの髪を切る阿部裕子さん

■息抜きの場

不安が募っていた2011年秋、同市の被災地支援団体、SAVE IWATE（セイブ・イワテ、寺井良夫理事長）の被災者雇用事業「三陸の和グルミプロジェクト」を知った。週5日ほどクルミの殻をむいたり、サイズごとに振り分ける作業をした。

理容師しかしたことがなかったが「これならできるかな」と参加したものの、実際にやってみると同じ姿勢で作業するため肩凝りに悩まされることもしばしば。大変だったが、沿岸各地から集まった10人ほどの被災者と過ごす時間は貴重な息抜きになっていった。

一つだけいすが置かれた店内に、シャキシャキと軽快なはさみの音が響く。大槌町で被災し、盛岡市に避難した阿部裕子さん(57)は4月上旬、同市神子田町に小さな理容室「ヘアーサロンあべ」をオープンした。

大槌町末広町で夫悦朗さん(59)と理容室を営んでいたが、自宅兼店舗が被災。悦朗さんと悦朗さんの母ミワ子さん(85)と共に盛岡市に避難した。

生活が一変し、しばらくは何も考えられない日々が続いた。同市で暮らそうと仕事を探しても、望んでいた理容関係はなかなか見つからず、年齢の問題もあり、就職活動は難航した。

不安が募っていた2011年秋、同市の被災地支援団体、SAVE IWATE（セイブ・イワテ、寺井良夫理事長）の被災者雇用事業「三陸の和グルミプロジェクト」を知った。週5日ほどクルミの殻をむいたり、サイズごとに振り分ける作業をした。

理容師しかしたことがなかったが「これならできるかな」と参加したものの、実際にやってみると同じ姿勢で作業するため肩凝りに悩まされることもしばしば。大変だったが、沿岸各地から集まった10人ほどの被災者と過ごす時間は貴重な息抜きになっていった。

「夢中で作業したり、震災当時のことや近況などをざっくばらんに話したり。同じ境遇だから余計な気を遣う必要がなくて楽だった」と、結局1年4カ月続けた。

■自分の仕事

殻むき作業にもすっかり慣れた13年1月、転機が訪れた。同市神子田町で「れいこの美容室」を営む藤沢麗子さん(66)から「よかったら使って」と同店併設で空き店舗となっていた理容室を紹介された。

阿部さんは「慣れない土地、それも激戦区での開業に不安だったが、理容師の道を諦めきれないところもあった」と振り返る。家族や周囲の人の「はさみを持っている姿が好き」「やってみたら」という声に後押しされ、再スタートを決めた。

サインポールや中古のいすは購入したが、シャンプー台などは以前の設備をそのまま使った。大きな工事が必要なかったことも一歩を踏み出す決め手になった。

大船渡市出身の藤沢さんは「地域は違うけど同じ沿岸。同業者として『これしかできない。やりたい』という気持ちも分かる」と見守る。

開店から約2カ月。まだまだ知名度は低く、時には利用客がない日もあり、「（再開したのは）間違っていたのかな」と気持ちが沈むことも。それでも、大槌町から避難してきた以前の利用客や藤沢さんの紹介を受けた地域の人が訪れてくれることが励みになった。

「軌道に乗るまで何年かかるか分からない。でも自分で決めたことだし後戻りはできないと思っている。周囲の応援も無駄にしたくはない。私にはこれしかないから、何があっても頑張る」と前を向く。

（報道部・初貝由美子）

釜石地区の理容店の被災状況　県理容生活衛生同業組合釜石支部の加盟理容店は86店舗で、震災により約6割が被害を受けた。うち大槌町は28店舗で、約9割の26店舗が被災した。同町内では現在、被害を受けなかった2店舗と仮設店舗などで再開した9店舗の計11店舗が営業している。

希望の種 芽吹かせて

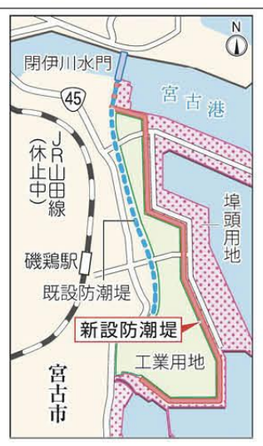
応援メッセージ

盛岡市浅岸1丁目
SAVE IWATE理事長
寺井　良夫さん(55)

仕事を失った被災者が現金収入を得る機会になればと思い、2011年秋に「三陸の和グルミプロジェクト」を始めた。こちらが戸惑いながら取り組んでいく中で、阿部さんには当初から参加し、工夫しながら作業をしてくれた。安定した収入を保証できず申し訳ない気持ちもあるが、作業をきっかけに新たな一歩を踏み出してもらえたのはうれしい。理容室を復興に向けた希望の種として、大事に育てていってほしい。

宮古・藤原地区 新たな防潮堤

県が海側に整備方針



既設と合わせ2重に 工業用地や住宅地 安全性確保へ万全

宮古市の藤原埠頭（ふとう）の津波安全対策について県は30日、海側に新たな防潮堤を整備する方針を示した。既設防潮堤と合わせて2重となり、東日本大震災の津波で甚大な被害を受けた工業用地や住宅地の安全性を高める。年度内の着工を目指し、2015年度末の完成を目指す。

同日の市議会全員協議会で説明された。新設防潮堤は、閉伊川河口部から神林地区を結び総延長2135メートル。高さは10・4メートルで、既設防潮堤から150～250メートル海側に位置し、臨港道路に沿って整備される。

新設防潮堤の整備により、工業用地（約30ヘクタール）は数十年から百数十年の頻度で発生する津波の浸水を免れる。既設防潮堤の陸側にある磯鶏地区の住宅地は、2重になることから最大クラスの大津波の浸水を防げる。

概算事業費は約93億円。国の社会資本整備総合交付金を活用する。藤原埠頭は埋め立て地のため、液状化対策や防潮堤にくいを打ち強度を確保。避難の迅速化を図るため、既設防潮堤を乗り越す形の道路も検討する。

市と宮古商工会議所は昨年3月、工業用地の安全性を高めるため防潮堤の位置変更を要望していた。山本正徳市長は「従業員の安全確保や木材流失の被害防止も図られ、復興に資する」と強調する。

また、閉伊川河口部に整備予定の閉伊川水門について市は同日、管理橋の歩道について、着工が遅れ、費用負担が大きくなることから設置しない方針を示した。管理橋は取り付け道路と合わせて幅員6メートルで舗装され、一般車両の通行が可能となる。

山田の不燃がれき1万トン 米沢（山形）搬出始まる

震災で発生した山田町の不燃がれきを山形県米沢市の処分場に搬出する作業が30日、同町船越の山田地区破砕選別施設で始まった。12月までに不燃がれき約1万トンを受け入れる予定で、被災地で課題となっていた不燃物処理の促進を図る。

初日はトラック5台で、木くずが混ざった土砂を中心に不燃がれき計約40トンを搬出。31日に同市の最終処理場に到着し、埋め立てる予定。

可燃物の受け入れ先が多いのに対し、不燃物の処理は調整が遅れていた。県は同市と昨年から協議を続け、今年になって受け入れが具体化した。本県の災害廃棄物は推計約525万トンで、うち不燃物は約105万トン。不燃がれきの処理率は4月1日現在で約30％にとどまっている。

被災地の不燃系廃棄物受け入れ 盛岡市、8月から

盛岡市は30日、沿岸被災地の不燃系災害廃棄物の処理を受け入れることを明らかにした。同市玉山区川又の最終処分場、市リサイクルセンターに埋め立て処分する。

市環境部によると、受け入れるのはコンクリート片、壁材などが混じり合った土砂系不燃物のうち、細かい木くずの混入が多く利用が難しい管理型土砂混合くず。8月から来年3月までに最大4千トンを処理する。

不燃系災害廃棄物については、県が昨年から今年にかけ、県内市町村に受け入れを要請。盛岡市は同センターの地元住民からおおむね理解を得たとして受け入れを決めた。

港湾機能回復へ決意

大船渡・茶屋前地区安全祈願祭

防潮堤や岸壁など着工

工事の無事故と早期完成を願い、くわ入れする関係者

津波で被災した大船渡市大船渡町茶屋前地区で県が行う防潮堤や岸壁などの復旧工事の合同安全祈願祭は30日、同地区の岸壁で行われた。大船渡湾の防潮堤復旧工事では着工第1号で、2015年8月に完成の予定。岸壁や埠頭（ふとう）などの工事も進め、港湾機能の回復を目指す。

施工業者7社が主催し、約40人が出席。県沿岸広域振興局の青柳天（たか）副局長が「被災者が復旧復興を実感できるよう、順次工事を進めていく」とあいさつした。

同地区は大船渡湾奥に位置する臨港地区で、津波により岸壁に保管されていた輸入資材などが流失。1メートルほど地盤沈下した。昨年12月から、埠頭約12ヘクタール分のかさ上げ工事が始まっている。

今回は同地区で復旧する防潮堤約1140メートルのうち、132メートル分の工事を開始。地上からの高さは約6・4メートルで、震災前より4メートルほど高くする。残る区間は14年度中の着工を目指す。

岸壁、物揚げ場などを含めた工事箇所は約2キロで、総工費は約51億1800万円。岸壁などは14年3月の完成を見込む。

現時点で県が復旧、新設を予定する大船渡湾内の防潮堤や岸壁、漁港などは約10キロ。15年度内の完成を目指している。

被災に負けない「高校生活劇」

青森中央高演劇部公演

きょう盛岡であす陸前高田

青森市の青森中央高演劇部は31日に盛岡市、6月1日に陸前高田市で「もしイタ2013～もし高校野球の女子マネージャーが青森の『イタコ』を呼んだら」を公演する。

作品は、東日本大震災で家族を失い、青森に転校してきた主人公の成長を描く、笑いあり涙ありの「高校生活劇」。道具や照明、音響を使わず、部員25人全員が声や動きで表現する。

31日は盛岡市中ノ橋通のおでってホールで午後7時開演。6月1日は陸前高田市竹駒町の陸前高田未来商店街多目的ホールで午後2時開演。開演30分前に開場する。上演時間は約1時間。ともに入場無料。

作品は、演劇を通して被災地のためにできることをしたいという部員の思いから2011年に誕生し、被災地で公演を続けている。12年には全国高校演劇大会で最優秀賞を受賞した。

同公演の問い合わせは（moshiita2013@gmail.com）へ。

～被災者からのメッセージ～

津波てんでんこ

題字・山下文男さん

工夫凝らした書店に

釜石市天神町の仮設住宅
桑畑書店経営
桑畑　真一さん(59)

釜石市只越町の店舗と自宅が被災し、現在は市内の仮設商店街で営業を続けている。活字は映像メディアとは違い、何回も読み直すことで考えを深められる。震災から2年がたち、本を読む余裕も出てきた。震災関連の本のラインアップを充実させるなど、被災地の書店として工夫を凝らした店づくりをしている。

市役所再建は高台で

陸前高田市気仙町
漁業
吉田　栄喜さん(63)

津波に対しては、住民が声を掛け合い、近くの高台へ素早く逃げることが大切だ。震災のときは津波が来ると直感し、家族と近所で高台の公民館へ避難した。残っていた人も逃げさせ、地区にいた人で犠牲者はなかった。市役所の再建場所は、現在の高台を望む。行政機能のまひや、人命が失われる事態を二度と許してはならない。

この紙面の著作権は岩手日報社が保持しています。無断転載、複製及び配布は禁止します。